

児童文学の創造

西本鶏介著



■ 大阪教育図書刊 ■

著者紹介

昭和九年、奈良県に生まれる。国学院大学文学部卒業。学生時代より児童文化活動に従事する。現在、児童文学批評のかたわら青年向けエッセイやルポ記事を書いている。日本児童文学者協会会員。トナカイ村児童文学会同人。主な評論に「若者の生き方」、訳書に「阿Q正伝」などがある。

児童文学の創造



昭和四十五年四月二十日初版印刷
昭和四十五年四月三十日初版発行
児童文学の創造 定価八〇〇円
著者 西本 鶏介

発行者 横山 実
印刷者 岩岡 敏志

発行所 大阪教育図書株式会社
東京都千代田区神田錦町三の十七
大阪市東住吉区田辺西の町六の四
郵便番号(東京)一〇一(大阪)五五六
振替(東京)五一〇四六(大阪)一一五五〇〇
©西本鶏介一九七〇・岩岡印刷・堀越製本

児童文学の創造・目次

一、児童文学の伝統と創造

——新しいロマンチズムを求めて——

(1) 童話から小説へ——5

(2) 詩人と小説家の融合——12

(3) 児童文学の中の政治と文学——22

(4) 詩をなくした貧乏悪物語——29

(5) 思想的イメージと童話的イメージ——34

(6) 児童文学のシュールレアリスム——41

(7) 良質な個性を持つ作家群——48

(8) ネオ・ロマンチズムへの一つの道——53

二、戦争体験と児童文学

——その作品をめぐって——

(1) 共通体験と個体験——60

(2) 民主主義児童文学の崩壊——67

(3) 「燃える湖」について—— 77

(4) 戦争悪をのりこえる文学を—— 97

三、 こんにちは、未明おじさん

(1) 永遠の生命を持つ文学—— 118

(2) 「さよなら未明」の主張—— 122

(3) 感激に生きる芸術家—— 126

(4) 人生に対する行動者—— 131

(5) 偉大な過去の伝統—— 135

(6) ネオ・ロマンチズムの花園—— 145

四、 児童文学とヒューマニズム

(1) 一生を徒勞に打ちこむ—— 151

(2) ヒューマニズムとはなにか—— 156

(3) 自己を愛する本能—— 163

(4) 大正デモクラシーと童心文学の成立—— 169

(5) 伝統童話のヒューマニズム——174

(6) 個人主義ヒューマニズムへの認識——195

五、戦争児童文学論

——その方法をめぐって——

(1) 解体してしまった戦争体験——201

(2) 個体験による戦争の真実——210

(3) 何故戦争を描くか——217

(4) 現代に通じる戦争体験——224

(5) 戦争のなかの人間——233

(6) 戦争をどう書くか——243

六、娯楽と文学に一線を——250

七、児童文学批評の基準——258

*

文学の原点に立つ・西沢正太郎——282

児童文学の伝統と創造

——新しいロマンチズムを求めて——

(1) 童話から小説へ

近代児童文学に対する伝統否定を契機として、ここ数年、児童文学の創作活動は、かつてないほどの活況を呈している。出版事情の好転の所為ばかりではないが、今日私たちの前に提出される新しい作品は、質的にはともかく、量的にはそれほど少なくない。特に長篇作品の隆盛ぶりは、大人の小説と同様、近頃の児童文学の顕著な動きの一つといえることができる。

しかし、こうした現象を見るにつけても、戦後児童文学のようや

くの開花をよろこぶと同時に、そのほとんどを占める新人たちのお粗末な作品を、果して児童文学の本格的発展などといって、手ばなしでよろこぶことができようか、という疑問に、ほくは絶えず煩わされるのだ。質的な豊かさも、文学的な面白さも少なく、ただいたずらに長いばかりで、商品化するために長篇型式を採ったとしかいえない作品が、少なくないからだ。

「児童文学の本質は、常に子どもに向かって働きかけようとし、未明童話の閉鎖性に反抗する。だから児童文学は、どうしてもリアリズムへ進んでいくのである。……環境と共に人間を描くこと、人間と人間、人間と事件、事件と事件の相関性の中で人間を描くこと——典型的な情勢の中で典型的な人間を描く方法へとほくたちは進んでいかなくはならない」（古田足日『近代童話の崩壊』）

たしかに現代の複雑で多様な人間像を捉えるためには、かなり大きな小説的骨組みが必要である。そしてまた、われわれの生活をお

びやかしつづける数々の社会不安が、児童文学者をも例外なく現実
に目をむけさせる結果、社会矛盾の追求というテーマの要請が生ま
れてくるのは当然なことといえよう。こうした要請にふさわしい方
法として、童話から小説への新しいリアリズム論が主張され、それ
が今日の長篇小説隆盛をもたらした原因の一つということができる。
個々の作品の特質はむろん異なるとしても、新しい批評家たちに
よる近代童話否定以後の多くのリアリズム作品を見る時、われわれ
は何よりもこのことに気づくはずである。

(例えば実際に、『とべたら本こ(山中恒)』、『サムライの子(山中
恒)』、『少年の海(吉田とし)』、『北風の子(鈴木喜代春)』、『山が泣いて
る(鈴木実他)』、『ドブネズミ色の街(木暮正夫)』、『あり子の記(香山美
子)』、等々の一連の社会的テーマを持つ作品群)

にもかかわらず、伝統美学のロマンチズム精神を否定してまで、
なぜこのような画一的な描き方(全体に対する個の被害者意識といった)

をしなければならないのか、といった素朴な疑問が、作品そのものから、どうしても解明し得ないのだ。

労働者の社会を描き、貧乏な子供を丹念に描きさえすれば、そこにすぐれたリアリズムの方法がありはしないか、といった認識の仕方、政治悪の中に、わざとらしく子供を投げこみ、卑俗な正義感によって感動を求めようとする既成概念の陳腐さ、少なくとも外見だけは現代的（みせかけの流行語や西部劇的エネルギー）であっても、その根底にある文学理念の非近代性としか、ぼくには思えない、創作態度のどこに未明否定以後の、所謂新しいリアリズムの本質があるのか、一向に合点がいかないのである。

たしかに、運命に対する人間の偉大さは、その悲惨な状況の描写を通ることによって明確になろう。美しさの強調は、醜悪を押し出すことによって、より適確となる。そして事実、こうした手続きを経た美しい愛の物語、感動的なヒューマニティに充ちた作品を、わ

れわれは古典として、数多く保持している。

したがって、今日、人間と社会や、存在と事件に関する意味づけが同一の手續きによって児童文学作品に作りあげられたからといって、ぼくはそれを、前近代的手法として軽率に非難するつもりはない。例えば、戦後の一般文学に広く行なわれている、「人間は自由であり、人生は絶望の裏側から始まる（サルトル）」、「損害を一定限度にくい止めるために、あらゆる場合に私は犠牲者の側に自分を置くことにした（カミュ）」といった不条理の文学観によって、現代に埋没している人間性の復活をかちとろうとする創作方法の勇敢な試みを、われわれは知っている。実際、第二次大戦後の世界文学の主流に立つものは、所謂実存主義的なこの方法に他ならないのだ。

それは、「作者の描く現実と、現実の有する感受性の間から、一切の明晰さと正確さを排撃し、默示的で脈絡のないスタイルによって、伝統のあらゆる美学を否定した獣的なドラマ（悪徳・苦惱・宿命）

へ直接的に荒々しく押しこんでいこうとする」、所謂全体小説の主張である。

とはいっても、いま、ぼくは、社会悪をテーマにしようとする児童文学作家たちに、この方法を学べというのでもなく、彼等の作品が実存主義的である、などといっているのでもない。（実際、彼等の作品は、自然主義的なるものと、社会主義的なるものの混同とした、ごく古いリアリズムにすぎない）

問題は、作品の中で、作家みずからの主体を通して、真実の人間を、人生の幸福をいかに輝やかしく鮮明に描いているかということである。リアリズムによって社会を描き、ロマンチズムによってメルヘンを描こうと、作家は自己の主體的な個性に適合し、それを充足させるスタイルを提示し、誠実な文学機能によって、子供に良質な感動を与えなければならぬ。真に新しい文学への変革は過去の文学に対する性急な決算でも、独断的で、新奇な批判の提出でも

ない。それは伝統の持つ美学と今日の創造性とのすぐれた調和の上に形成されるはずのものである。

「吾々の児童文学の中心的目標——対象は、//重要産業労働者の児童、及び農村の貧農の児童」である。だから、彼等の為の文学たらんとするには、何よりも先ず彼等のより関心する問題、及び真に彼等自身の問題たり得る問題——それを捉え来り、それを充分理解させ、それに情熱的な関心を持たせ、行動化へと導く——そこに吾々の文学に取扱わるべき題材が在る。これこそ題材を決定する唯一の条件であらねばならぬ。」（槇本楠郎『プロレタリア児童文学の根本問題』）

このプロレタリア童話以来の、素材主義優先の公式を今日的リアリズムなどといって歓迎することのできた児童文学の蜜月時代は、今や遠くすぎ去ろうとしているのだ。

「資質によって呪術的世界に安住することは全く無意味である。未明のような強烈な資質の持ち主でない以上、小児性におちいって

しまう」

という古田足日氏の言葉に、ぼくは疑問を持たない。だが、今日の新人たちの多くは、未明が呪術的世界に安住したということ以上に、観念的素材主義世界に停滞していることのつまらなさ、つまり文学の資質の低さから出てきた、詩精神の持ち合わない、したがって童話の書けない新人たちの主体の弱さを指摘したいのだ。

(2) 詩人と小説家の融合

近頃の児童文学作品を読む時の、あのかさかさしたいらだたしさは、いったい何によるものであろうか。現実の悲劇的な混とんから、正しく生きようとする人間の姿が（少なくとも表面的には、人間解放の理想型式として描かれているのだが）、実は通俗小説の裏返しともいえるべき、はなはだたわいもない貧乏物語にすぎなかったりするのだ。そ

して作者が、大いに深刻がり、悲しがつたりすればするほど、ほくの心は、いっそうわけのわからない苦渋にみちていくのである。

——ああ、日本人というのはよほど貧しい人種なのだろうかと——

「童話が、あらゆる文学の規矩であり、すべて文学には童話的なものがなければならないというのは、日常卑近なものの中に、そうした象徴性、対応性を見ることが、そこに錯雑し、混乱した現実世界が、ある秩序と連関を持ち、素朴な統一と調和をとってくることの故だと思う……。苦渋で非現実的な現実が、どうしても、牧歌的、或いは童話的な幸福な素朴性を拒むときにも、童話の方法の不思議な自由さは、現実処理に於ける豊かな可能性を示して我々を助けてくれるにちがいない」(山室静『文学と倫理の境で』)

非浪漫的な現実家である新人たちを見てみると、こうした童話の世界などというものは、彼等にとっては、およそ現実とかけ離れた子供っぽい観念論ぐらいにしか映らないのではないか、と疑ぐりた

くなるのである。

児童文学作家たるものは、作家である前に、少なくとも本質的には詩人でなくてはならないのだという常識をほくは信じたのだ。あえていうなら、現実がいかに悲劇的で残酷にみちていようと、作家自身は決してその混乱にわずらわされてはならない。彼の死ぬほどの苦悩が、不幸との血みどろの戦いが、已れの内部で克服され、浄化された時にこそ、その作品は、「生きる」という人間の切実な願いに、しみじみとした美しさをもって答えてくれるのである。冷たく煩雑な社会から、清澄で素朴な「生の本質」を提出してくれるのは、思想家でも道德家でもない、真の詩人の仕事に他ならない。そして、この「浄化された真実（純粹な美）」に於ける創造（作品）こそが、すぐれた文学による人間形成への参加という児童文学本来の機能を持ち得るものではないかと。

P・ルベルディはいつている。「詩は精神と現実との沸騰的な交